制作スタジオは緑に囲まれ、裏手には蓮池も広がる。着ているのは現在手がけるブランド「無用」の服＝中国・珠海市

ファッションデザイナー　馬（マー）　可（コー）さん（44歳）

「中国精神」ブランドで復興

中国では「彭麗媛（ポンリーユアン）のデザイナー」と呼ばれている。彭麗媛とはファーストレディー、習近平（シーチンピン）国家主席夫人のことだ。

2013年、彭さんが夫とロシアなどを訪問した際、その「中国風」ファッションにメディアの注目が集まった。以後、彭さんが外遊したり、国内で外賓と会見したりする度に報道は過熱。「麗媛スタイル」と呼ばれ、模倣する富裕層の女性が急増した。そのデザインをほぼすべて手がけている。だがそれは、デザイナーとしての一側面に過ぎない。

20年以上前にも、中国で馬さんを何度か取材した。鄧小平（トンシアオピン）の大号令で始まった改革開放が安定期を迎え、「服装（フーチョワン）」という言葉がようやく人口に膾炙（かいしゃ）し始めた時期。広州のアパレル企業で働き出したばかりだったが、その独創性と実力は当時から群を抜いていた。コンテストでは木の皮や板を素材に用い、新作発表のショーでは、当時の中国では珍しいアシンメトリー（左右非対称）なデザインを発表。並み居る先輩デザイナーを押しのけ、20代で「中国ファッションデザイナー・ベスト10」にも選ばれた。

順調なスタートを切ったかに見えたが、世界に通用する「中国原創品牌（中国オリジナル・ブランド）」をつくるという理想と現実との間で悩み続けた。当時の中国ファッション業界は黎明期（リーミンチー）。アパレルメーカーの経営者でも、自分のすべきことを理解していなかった。「一方で彼らは数字に固執。常に、質よりも量、規模、売り上げを求めた。次々と起こる問題の処理に翻弄（ほんろう）され、本来の仕事に専念できなかった」

理想の環境を求め、1996年、広州で前夫とブランド「例外（リーワイ）」を立ち上げる。麻や綿を多用、東洋の美学と現代的なトレンドを融合させたデザインが大都市の女性に支持され、ブランドは急成長。だがここでも、質より規模拡大を求める前夫との路線の違いが表面化。10年後、自ら育てたブランドから離れる決断をする。

中国全土を歩き、僻地（ピーディー）で生活しながら「服とは何か」を見つめ直した。目にしたのは先祖伝来の服を着る農民の姿。「昔から作ってきた服を同じように作り、着る。それだけ。市場も流行も無い。服の概念が変わりました」

現在は広東省珠海の海と山に囲まれた小さな街に制作スタジオを構える。ブランド名は「無用（ウヨン）」。目指すのは見捨てられた手工芸の復興だ。

スタジオは中華民国初代総理、唐紹儀（タンシャオイー）の旧居跡「共楽園」の一角にある。緑あふれる環境に山岳地帯から少数民族の職人を招集。伝統織機で織った布を手で縫い、刺繍（ししゅう）を施し、植物からとった染料で染める。出来上がるのは素朴ながら、どこか高潔な輝きを持つ服だ。舞台衣装も手がけ、08年、創造性を高く評価した英ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館が作品を展示。同年、中国人デザイナーとして初めてパリ・オートクチュールコレクションにも参加した。

「中国精神を世界に伝えるブランド」を夢見て、今も模索を続けている。

文・竹端直樹　写真・郭允

◀3面に続く

ご意見・ご感想はbe@asahi.com

◎ 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

「伝統手工芸の伝承、革新が目的のスタジオ」

フロントランナー Front Runner

（b1面から続く）

馬 可さん　ファッションデザイナー

――「無用」とは、面白いブランド名ですね。

中国経済が急発展する中、すぐに成果が出ないものは「無用（役に立たない）」と見なされました。目先の利益を優先し、大切なものを無用と決めつけた。でも、工業製品に入れ替わって消えたものは、本当に無用でしょうか。

私たちの生活スタイルはイギリスの産業革命後に生まれたもの。250年程度の歴史しかありません。人類の長い歴史の中では一瞬のこと。失ってしまったもの、これから失いそうなもののために何ができるか考えました。人の目に無用と映っているものを価値あるもの、意味あるものに変えていく。そのための選択肢を用意したかったのです。

――なぜ、そう考えるようになったのですか。

「例外」を離れてから、少数民族が暮らす農山村を旅しました。農家に宿泊。農民と一緒に働き、食べ、寝る。原始的で何もないのに、感動的な生活でした。人々は伝統的な手工芸で服を作り、着ていた。学校で学ぶファッションは、歴史と市場調査の二つの角度から成り立っています。でも彼らの服には流行も市場もない。変化しないという意味では歴史すらなかった。環境に負荷をかける大量生産・大量消費をやめ、最も簡単で基本的な生活や服に回帰したい、「贅沢（ぜいたく）な清貧」を目指したい」と考えるようになったのです。

少数民族の職人の刺繍を見る＝中国・珠海市の制作スタジオ

少数民族の技

――スタジオでは少数民族の方々も働いています。

貴州省の苗族（ミャオ）や侗族（トン）の人が、布を織り刺繍をしてくれています。伝統的手工芸から生まれる布を、藍など植物の葉や根からとった染料で染めます。完全な手作業なので時間も費用もかかる。ワンピースやアンサンブル1着が7千元（約13万円）前後になりますが、技術継承のための費用でもあります。「無用」はただの商業ブランドではなく、手工芸の保護、伝承、革新を目的とする公益組織です。

職人が貧困から抜け出し、技術で生活できるようサポートすることも重要です。でも、「貧困地区の人々を助ける」のではありません。私が農村で目にしたのは、助け合う精神。このスタジオでも同じです。私たちは布や素材を提供してもらっているのです。

――日本にも何度か来ています。影響を受けたデザイナーはいますか。

初めての訪日は24歳。近代的なビルと古い寺社、前衛的な服を着る若者と着物姿の舞妓さん、袈裟姿の僧侶。「矛盾した共同体」というのが第一印象でした。

影響を受けたのは、三宅一生、川久保玲、山本耀司の3氏。欧米的な審美から独立した作品群は「中国オリジナル・ブランド」をつくるという私の信念を確固たるものにしてくれた。禅の思想家・鈴木大拙や『清貧の思想』の作家・中野孝次にも影響を受けました。

麗媛スタイル

――彭麗媛さんの服のデザインは「無用」とは全然違いますね。

「無用」のデザイン思想は万人に理解されるものではありません。二つのデザインは別々の路線です。

彭麗媛さんは、1990年代から、以前のブランド「例外」を愛用してくれていたんです。テレビ局の記者の紹介で会ったら、「あなたのデザインが好きで他のブランドは着ない」と言われました。私が「例外」を離れると、すぐ「着る服が無くなってしまった」と連絡をくれました。彼女が「春節聯歓晩会」（中国の紅白歌合戦）に参加した時の衣装もデザインした。私のデザインを信頼してくれる以上、私にも責任がある。外遊時の服も引き受けることにしました。

――自分の中に矛盾はなかったんですか。

ありました。すでに新しいデザイン活動を始めていましたから。でも、中国のファーストレディーが外国に行くのに、西洋ブランドで着飾るのも良くないし、古代の服を着ていくわけにもいかない。「ファーストレディーが中国の文化や精神を伝える服を着ることには意義があるし、影響力も大きい」と考えました。実際に世界中で報道された。こんなに影響力があるとは思いもしませんでした。

――「麗媛スタイル」に富裕層は憧れています。

「『例外』と『無用』の服だ」と公表したら、取材が殺到。「彭麗媛のデザイナー」と騒がれましたが、私自身は一度もそんなことは言っていません。「彭麗媛の服は人気がある。『無用』の中に、彼女が着ている服のラインをつくればいい」と言う人もいます。でも、やるつもりはありません。それをやったら、私ではなくなるからです。

プロフィル

★1971年生まれ。92年に蘇州絲綢工学院（現・蘇州大学）に入学し、ファッションモデルとデザインの勉強を始める。

★94年に卒業し、広州のアパレルメーカーに就職。その数カ月後に、北京で開かれた「第2回ブラザーカップ国際青年デザイナーコンクール」で金賞を獲得する。受賞作は、木とニットで兵馬俑（ようへい）を再現した「秦俑」という作品だった。写真は、そのころに撮影。

★95年、「中国ファッションデザイナー・ベスト10」に選ばれる。翌年、中国初のデザイナーズブランド「例外（EXCEPTION de MIXMIND）」を広州で立ち上げる。

★2006年、制作スタジオ「無用手的芸術中心」を設立。その後、天然素材と手工芸復興をテーマに新ブランド「無用」を立ち上げる。08年、英国ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館で個展を開催。中国人デザイナーとして初めて、パリのオートクチュールコレクションに参加。

★13年、習近平国家主席夫人・彭麗媛さんのロシア訪問時に、依頼を受けてデザインしたファッションが世界中のメディアから注目される。

◆次回は、サントリーホールディングスが進める森づくりプロジェクト「天然水の森」で、責任者を務める山田健さんの予定です。

◎ 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。